

●2月18日 今年度最終回の地域説明会が木津川市加茂文化センターで開催しました

ここでは地元で野鳥の写真家「藤本きりゑ」さんに出展をお願いしました。また木津川市山城町の福井波恵さんに出展とお話をお願いして、盛り上げていただきました。この日は兵庫県三田市での「近畿子どもの水辺」発表会（昨年は：奈良県で開催）が開かれ、里山の会で沢山活動の手助けをいただいていた皆さん（北野・小林・田中）が主力として役割を担って活動され、こちらのほうは少し手薄になりましたが里山の会の多くのスタッフが頑張りました。当日他の催しで来館された皆さんにも案内して27人のご芳名の記入をいただくことができました。来館者からはよく頑張っているねとお褒めの言葉をたくさんいただきました。スタッフの皆さんのご苦勞にやりがいいがあったと肩の荷が下りました。ご苦勞様でした。そして発行書籍のご購入も数名の方がいました。展示会にご苦勞をいただいた皆さん有難うございました。皆さんからいただいた課題や教訓を生かして来年度も開催してゆきたいと思います。スタッフの皆様ご苦勞様でした。

●2月19日 木津川流域クリーン大作戦 降雨予報のため中止となる

昨年9月ごろから取り組みを始めて数回の実行委員会を開催し、この日を迎えましたが、数日前から雨天の予報が伝えられてきましたので、実行できるのかと心配していましたが、夕方に降雨の予報19日は中止と電話が入りました。里山の会として数名の参加が予定されていましたが、少し残念でした。しかし26日を予備日として設定されているのでこの日の実行を期待したいと思います。

●山城農業・農協問題研究会が開催され「環境にやさしい農業」として会員の佐藤誠さんが講演報告

亀岡市での取組

昨年3月議会での市長の施政方針演説に「国のモデル的先進地区への選定とオーガニックビレッジを宣言することを目指してまいります。有機農業の生産から加工、流通、消費まで一貫した取り組みで、京都・亀岡保津川公園の地域を中心とし、消費では小学校給食への有機米の試験的導入、保育所へのオーガニック給食の実施など継続的な活動を段階的に実施し、循環型農業や6次産業化など、経済・社会・環境の調和が取れた持続可能な農業を推進してゆきます。」とされています。

京田辺市での動き

「学校給食に有機米を」「今春からの施策」を掲げて村上新平さんを囲む集いが社会福祉センターで10数人の参加で2月19日に行われました。

「有機農業の推進に関する法律」による有機農業の定義は以下のとおりです。

1. 化学的に合成された肥料及び農薬を使用しない
2. 遺伝子組換え技術を利用しない
3. 農業生産に由来する環境への負荷をできる限り低減する 農業生産の方法を用いて行われる農業です

連載開始 次号から少しずつ解説をお願いしています。ご期待ください。

国際的な委員会（コーデック委員会が作成したガイドラインにおいて規定した生産の原則）

有機農業は、生物の多様性、生物学的循環及びドジョウの生物活性化等、
農業生態系の健全性を促進し強化する全体的な生産管理システムである

●カスミサンショウウオの成体も発見

先にもお知らせしましたように昨年の3月ごろ一帯の土砂流出防止の工事が行われ、今年の産卵はどうなることかと気をもんでいたところ、2対の卵嚢が発見され続いて一対が発見されました。やれやれと胸をなでおろしていましたが、2月21日の調査で下の池に5対の卵嚢が追加されていました。合計8対になりました。少なくとも8匹のメスの存在が確認されたことになります。



同時にオスも数匹は生育していることが推定されます。卵嚢近くで成体の1匹も発見されました。雌雄は判断できませんでしたが、動きはほとんど見られず静かにしていました。発見した方によると産卵した直後の発見だったのではなかったのという判断をされていました。これで昨年の工事の影響はそれほどでなかったと大きく胸をなでおろしています。しかし一時期、下の池が干しあがる時があって産卵が行われるだろうかと心配がありましたが、今では水位が回復しました。また水の流れるところも土砂が流れ落ち、幅が広がることが現実になっています。今のところ下の池（産卵している）ところへの影響は少ないと思われますが、状況は確実に環境条件が変化しているように見えます。大きくならないような対応が必要ではないでしょうか。雨トコで水の流入確保で精いっぱい、我々素人集団ではその対策が見つけれないのが現実です。顧問の先生から環境変化で生育が不可能になる場合を考慮しておくべきだと発見時からご指導を受けています。なかなか実現できないのが今の現状です。いったん手を付ければ継続して観察管理の必要が生まれてくるので、そこまで実行できる自信がないのです。（必要性は理解できますが、力量の限界です・・・）

●第25回里山の会主催の里山講演会「自然と環境」の参加申し込み人数が175人に到達しています。

先着順に200人を定員にして会場の広さを考えてA組、B組に分けて講演をお聞きいただく組と現物を見る組の二つでの対応する2部制の入れ替え制で対応を考えてきましたが、申し込み4日間でこれだけの受付になりましたので、会場借用時間の関係で苦慮しています。めったにないチャンスですし、できるだけ多くの方々に触れてもらいたいとも思っています。今この反応の大きさに里山の会では大変驚いています。

●炭焼き体験参加者の募集

里山の会では発足した25年前から打田薪炭組合のご協力で一窯で150kg以上薪炭を生産できる取り組みを継続し、山仕事の一つの技術の伝承を目標に毎年冬の取組として取り組んできました。薪炭組合の皆さんが高齢で急斜面での原木確保がきつくなって、また薪炭の需要がなくなってきたことで組合を解散されましたので、里山の会が施設を引き継ぎましたが、昨年は一窯全部灰になって成果物を手にできない事態になりました。それで今回は薪炭組合の主力として活躍されていた植西干字さんにご指導をいただき、しっかりと本物の技術を伝授していただけることになりました。ここも残り少ない技術を学べる数少ないチャンスです。こぞってお越し下さい。

3月3日原木の運搬（軽トラックで運び込む）

3月11日炭焼き窯に原木を詰め込み

3月12日着火 火の見回り 煙の観察 空気調整の時期等を学びます

参加は無料です。この事業は京都府交響プロジェクト事業に申請しています。

●小川芳也さんの松江通信 No. 21

では、次に斐伊川が砂河川と呼ばれる理由を考えたいと思います。木津川と斐伊川ともに「花崗岩」が山地部を占めていることは以前に紹介しました。斐伊川上流部でも木津川同様に住居の建設や生活用の薪炭などのために樹木伐採が行われていた筈ですが、木津川に比べて人口が少ないでしょうから山地荒廃までは至っていないと思われます。斐伊川流域上流部の船通山をはじめとした山々には砂鉄や鉄鉱石が多く含まれていたのも「製鉄」が盛んに行われていました（たたら製鉄）。そして、山砂に混在している砂鉄や鉄鉱石を抽出する方法として採用されたのが「鉄穴流し：かんなながし」です。山砂と鉄の密度の違いを利用した採取法で砂鉄や鉄鉱石を含んだ山砂を水路に投入すると軽い土砂は下流に流されて重たい鉄は底へ沈んでいきます。この作業を何回か繰り返して純度の高い砂鉄を得ていました。高い製鉄技術のおかげで人々の生活は豊かになったようですが、大量の土砂が人為的に流されたために天井川で砂河川の斐伊川になりました。この続きは次回に・・・

●太田敏之さんの小笠原旅行日記 追記①

私が小笠原旅行記を書いたことで、草内の古川章氏から明治時代に興戸の弘道高等小学校の校長をされていた猪子氏豊氏という方が、晩年には母島で幼稚園を経営されていたこと等の情報をいただきました。現在母島は“ははじま丸”などが出入りする沖港周辺で500人ほどが暮らす集落があるだけですが、戦前はもう一つ島の北端に北村という集落があり600人ほどの人が暮らしていたようです。この集落に幼稚園があったとどこかで目にしたように思いますが、それも定かではありません。この北村は今では完全に廃村になっており、わずかに小学校跡地に製糖圧搾機のローラーを積み重ねた門柱が残るのみで、その門柱も含め他は完全に熱帯の植物に覆い隠されています。戦前の幼稚園は都会の裕福な子供が行くところで、10人に1人くらいしか幼稚園には行っていなかったそうです。そんな中で、母島に幼稚園というのが不思議に思いましたが、戦前の小笠原の住民の収入は農民でも漁民でも、本土とは違い月に100円以上あったそうですから、そんな母島に幼稚園があったのかもしれませんが。

現在は父島と母島に村立の小中学校が各校ずつ、それぞれに幼稚園もあるようです。高校も都立小笠原高校というのがあるようです。